

## 過去7年間に於ける当院産科の診療圏の変遷

——病院移転前後の変化——

鮎 貝 るみ子, 千葉 裕子, 目黒 順子  
千 田 道代, 坂 田 智恵子, 柳 原 みずほ  
小 泉 美由紀, 村 口 喜代

### はじめに

当市立病院は、昭和55年7月1日より、旧病院の所在地一番町4丁目より、現在の清水小路に移転した。産婦人科病棟は、産科のみ独立し、名称も周産部となった。病床数は18床から35床（実質）となり、分娩件数は徐々に増加し、56年度をみると、過去19年間の平均分娩件数438件をはるかに越え、929件にものぼった。

私達は、移転前後の過去7年間に、当市立病院産科で出産した者について、その居住圏の比較、検討を行なった。

### 研究方法

昭和50年より、55年6月30日までに、旧病院で出産した2503名と、その後56年12月までに、新病院で出産した1251名を対象として、それら対象者の居住地を、入院病歴より抽出し調査した。尚、里帰りのものは、寄留先をその居住地とし、他院より送られたものも数として加えた。

### 結 果

#### 1. 分娩取扱い数の年次別推移（図1）

取扱い分娩数の最低は、昭和54年の413件、最高は昭和56年の929件であった。新病院に移転後から徐々に増加し、56年度には著明な増加をみるに至った。

#### 2. 月平均分娩取扱い件数（図2）

7年間の月平均分娩取扱い件数は、旧病院では

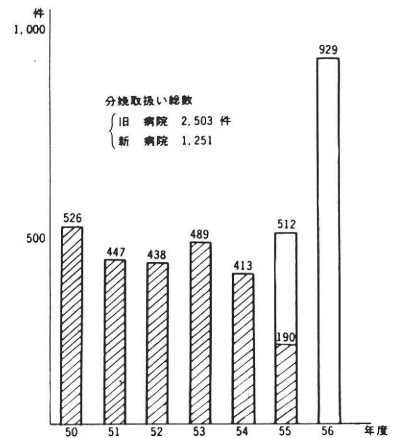


図1 分娩取扱い数の年次別推移

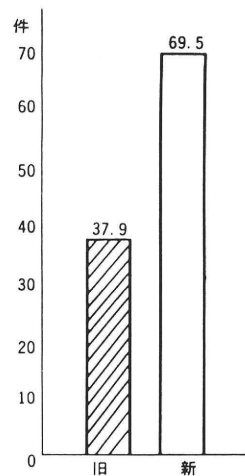


図2 月平均分娩取扱い数

37.9 件であったが、新病院では 69.5 件であり、ほぼ 2 倍となった。

3. 旧病院での仙台市内居住者の分布 (図 3)

大きな丸を 10 人、小さな丸を 1 人として示した。最高は荒巻の 111 人、以下鶴ヶ谷 62 人、原町 56 人、桜ヶ丘 53 人、長町 45 人、上杉 41 人などが多い地域で、分布の状況は北部に多い。

4. 新病院へ移転後の仙台市内居住者の分布 (図 4)

総数が 1014 名で、旧病院のほぼ半分であるた

め、分布がまばらに見える。最高は、沖野 38 人、以下八木山、郡山、長町、南小泉などが分布の多い地域で、旧病院と比べ南地区の伸びが著しい。

5. 取扱い数の多い地域—仙台市内—(表 1)

取扱い数の多い地域を上位 10 位までを、新病院、旧病院間で比較した。鶴ヶ谷、原町、長町、八木山などは新旧共通してみられる地域であるが、旧病院で上位であった荒巻、桜ヶ丘、上杉、小田原などの北の地域が、沖野、郡山、南小泉、若林などの南の地域に変わってきた。全取扱い数に占

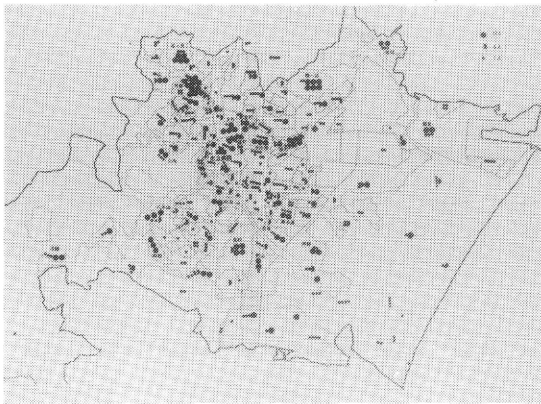


図 3 当院産科の診療圏 (仙台市内, 旧病院)

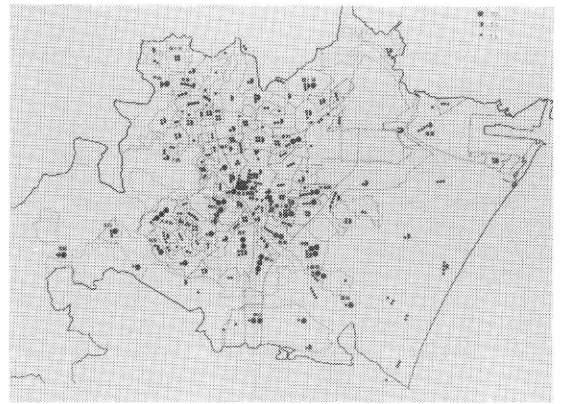


図 4 当院産科の診療圏 (仙台市内, 新病院)

表 1 取扱いの数の多い地域

(仙台市内)

順位	旧 病 院				新 病 院			
		取 扱 い 数				取 扱 い 数		
		実数	割合(%)			実数	割合(%)	
1	荒 巻	111	4.43	}	沖 野	38	3.03	
2	鶴ヶ谷*	62	2.47		八 木 山*	32	2.55	
3	原 町*	56	2.23		郡 山	31	2.47	
4	桜ヶ丘	53	2.11		長 町*	29	2.31	
5	長 町*	45	1.79		南 小 泉	28	2.23	
6	上 杉	41	1.63		若 林	24	1.91	
7	八 木 山*	37	1.47		{ 向 山	22	1.75	
					{ 原 町*	22		
8	小 田 原	34	1.35		大 和 町	19	1.51	
9	鈎 取	30	1.19		鶴ヶ谷*	18	1.93	
10	{ 富 沢	29	1.15					
	{ 錦 男	29	1.15					

める割合は、旧病院では、1位荒巻4.43%（111人）、2位鶴ヶ谷2.47%（62人）、3位原町2.23%（56人）、新病院では1位沖野3.03%（38人）、2位八木山2.55%（32人）、3位郡山2.47%（31人）であった。

6. 増加した地域—仙台市内—(表2)

増加した地域は、沖野22人から38人、全体に占める取扱い割合は、0.87%から3.03%（増加率3.48倍）、郡山21人、0.83%から31人、2.47%（増加率2.97倍）、南小泉24人、0.95%から28人、2.23%（増加率2.34倍）、以下向山、若林などがこれに次ぐ。また、大和町が0人から19人に急増した。これらは全て南の地域である。

7. 減少した地域—仙台市内—(表3)

減少した地域は、桜ヶ丘53人から4人、全体に占める取扱い割合は、2.11%から0.31%（減少率6.80倍）、荒巻111人、4.43%から9人、0.71%（減少率3.70倍）、上杉41人、1.63%から6人、0.47%

表2 増加した地域

	取 扱 い 数				増加率
	実 数		割 合 (%)		
	旧	新	旧	新	
沖 野	22	38	0.87	3.03	3.48倍
郡 山	21	31	0.83	2.47	2.97
南小泉	24	28	0.95	2.23	2.34
向 山	20	22	0.79	1.75	2.21
若 林	22	24	0.87	1.91	2.19
大和町*	0	19			

表3 減少した地域

	取 扱 い 数				増加率
	実 数		割 合 (%)		
	旧	新	旧	新	
桜ヶ丘	53	4	2.11	0.31	6.80倍
荒 巻	111	9	4.43	0.71	6.23
錦 町	29	4	1.15	0.31	3.70
上 杉	41	6	1.63	0.47	3.46
小田原	34	9	1.35	0.39	3.46
宮 町	25	4	0.99	0.31	3.19
北 山	22	4	0.87	0.31	2.80

(減少率3.46倍)、小田原34人、1.35%から9人、0.39%（減少率3.46倍）、宮町25人、0.99%から4人、0.31%（減少率3.19倍）、北山22人、0.87%から4人、0.13%（減少率2.80倍）などであり、これらは全て北の地域である。

8. 旧病院での仙台市外居住者の分布 (図5)

一番大きな丸を100人、半丸50人、以下10人、1人として示した。最高は泉市の205人で、旧病院

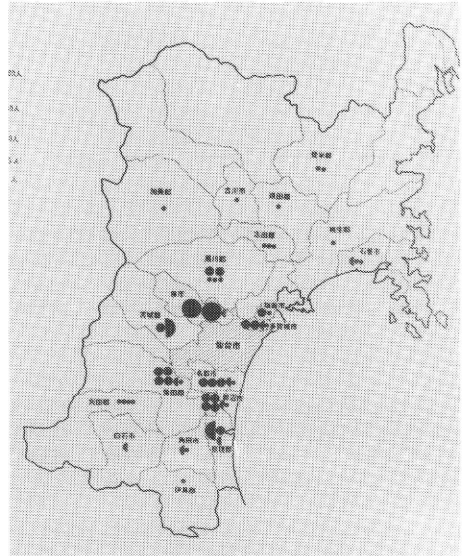


図5 当院産科の診療圏（仙台市外、旧病院）

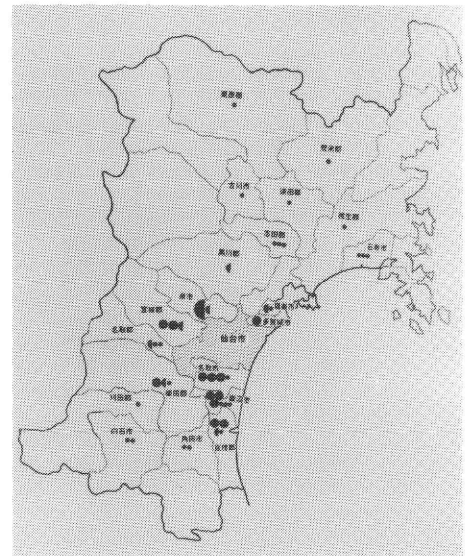


図6 当院産科の診療圏（仙台市外、新病院）

表4 取扱い数の多い地域

		(仙台市外)					
順位	旧 病 院				新 病 院		
		取 扱 い 数				取 扱 い 数	
		実数	割合(%)			実数	割合(%)
1	泉 市	205	8.19	→	泉 市	55	4.00
2	亶 理 郡	65	2.60		岩 沼 市	33	2.64
3	宮 城 郡	60	2.40		名 取 市	31	2.48
4	柴 田 郡 岩 沼 市	46	1.84	↗	亶 理 郡	26	2.08
5		宮 城 郡		25	2.00		
6	名 取 市 多 賀 城 市	26	1.04		柴 田 郡	16	1.28
7		多 賀 城 市		10	0.80		
8	黒 川 郡	23	0.92		名 取 市	7	0.56
9	塩 釜 市	11	0.44		塩 釜 市	6	0.48
10	名 取 市	10	0.40		石 巻 市 志 田 郡	3	0.24
						3	

での全取扱い数の8.2%を占める。以下、亶理郡、柴田郡、岩沼市、名取市の順位であった。

#### 9. 新病院での仙台市外居住者の分布(図6)

最高は、泉市の55人であるが、全体に占める割合は4.4%と、旧病院に比べ半減している。以下、岩沼市33人、名取市31人、亶理郡26人などが多い地域である。

#### 10. 取扱い数の多い地域—仙台市外—(表4)

取扱い数の多い地域上位10位までを、新病院、旧病院間で比較した。泉市、亶理郡、柴田郡、岩沼市などは新旧共通して上位を占めている。泉市は、新旧共通して1位であるが、全体に占める取扱い割合は、8.19%(205人)から、4.00%(55人)と半減している。また名取市が、1.04%(26人)から2.48%(31人)とその増加が目立っている。

### 考 察

新病院への移転後、当院産科を利用する人は、仙台市内では南の地域、特に沖野、郡山、南小泉、若林などの比較的近い距離から来院する人が増加し、逆に北の地域からの人が減少した。特に取扱い数の激減した、荒巻、桜ヶ丘、上杉、小田原な

どの北の地域の交通の便について検討してみると、旧病院当時は、市営バスを利用する場合、乗り換えなしで旧市立病院前バス停で下車する事ができたが、新病院移転後は、一部グリーンバスを利用できる以外は、ほとんどが駅前、または他の停留所で乗り換えをしなければならなくなった。この事は、交通費及び時間、身体的な負担を招き、患者側にとっては歓迎されない事となった。逆に、取扱い数の急増した、沖野、郡山、南小泉、若林などでは、距離が近くなったばかりではなく、すべて乗り換えなしで来院することができ、宮城交通バス、市営バスともに利用できる本数も多い。

仙台市外においては、仙台市内ほどの大きな変動はなかった。しかし、泉市の半減と、名取市の倍増は、非常に目立った事であった。ある意味では、泉市は距離的にも交通の便からいっても、仙台市内と同質の診療圏と見ても妥当である。旧市立病院当時よりも、泉市と市立病院までの区間には、同一規模の総合病院が増加し、さらに交通が不便になったことも、来院者の大巾な減少を招いた原因と思われる。一方、名取市は、仙台市に隣接しており、市内には大きな病院がなかった事と、移

転後市立病院と距離的にも近くなり、交通の便が良くなった事など、病院選択上有利な条件が重なった事が、来院者の増加を招いたと思われる。

今回の調査にあたって、仙台市内については、当初からこうした結果はある程度予想されていた事であったが、交通の便の良し悪しによって、患者の流れがこれ程までに大きく変動するとは想像以上のものがあつた。特に仙台市内は、同一規模の総合病院が散在するという特徴を持っている。総合病院でお産を希望する者にとっては、各病院の設備内容、スタッフの力量等に、思い至る術がある訳ではなく、むしろ各病院とも、同一レベルの医療機関としての認識が一般化しており、こうした条件下では、交通の便の良し悪しが、病院選択の重要な規準となってくる事を物語っている。

近年、出産に対する人々の考え方は、大きく変わりつつあり、これまでの無痛分娩などのような人工的な楽なお産よりも、より自然なお産への志向が強まりつつあると言われている。また、新聞や種々の雑誌、テレビなどの多様な情報を通じて、妊娠、出産は本来病気とは異なり生理的な現象であるが、母体や新生児が常に異常と背中あわせであるという特殊性を持っており、そうした認識が普及しつつある。このことによって、開業の産婦人科医院での出産よりも、より設備の整った大きな規模を持つ総合病院での出産を希望する人々が多くなってきている事は否定できない。こうした昨今の経緯から、総合病院での出産を希望する者の数は、今後さらに増加していくものと思われる。

当院産科においては、新病院移転後、急速に分

娩数の増加をみたが、このことは、先に述べた一般的現象のみでは説明しきれない事態である。今回は、この要因についての科学的検討を行っていないが、著者らスタッフ側の推測として指摘すれば、移転という事によって、市立病院の存在を強くアピールした事は、非常に大きな要因であったと思われる。

しかも、立地条件の良さも、重要な条件として考慮される。また、患者側の要求、期待に対して、医療スタッフ側が、対応の努力をしてきた事、さらに他の殆どどの総合病院が分娩予約制を採用しているのに対して、当院では予約制をとっていないことも、分娩数増加の一因となつたであろう。里帰り分娩の数も、他院に比べ、増加してきており、その他病院へ通院して来る人々の間での、口コミによる評判なども、ある程度要因として考えられる。

## おわりに

新病院へ移転後、当院産科における分娩取扱い数は急速にふえ、旧病院当時の2倍増をみるに至つた。移転前後の過去7年間における診療圏は、北の地域から南の地域へと明らかな変化をみたが、病院を選ずる場合、病院の立地条件、とくに交通の便の良し悪しがかなり大きな要因となつていることが、わかつた。

本論文の要旨は第3回宮城母性衛生学会において発表した。

(昭和58年3月23日 受理)